

集 会 所 で ぼ ん や り

牧師 山本 護

奇妙な夢を見ました。どうやら太平洋戦争の空襲のさなか、織田作之助が「馬地獄」で書いたような粗末な町で、逃げるでもなく困惑しています。夢の素材は、数多の記録映像なのか、母や祖母から聞いた体験か。それともこの時期、世を循環している戦争の気流が脳内へ夜盗のごとく忍び込んだのでしょうか。翌朝、伝道所の庭を草刈りしようと、集会所へ入ってみると、朝日が粒子となって室内に流れ込んでいます。



窓の外は夏の木々、室内の様がガラスに映り込み、昨夜の空襲がその窓で三重映しになって、蝉は天使の讃美のようにやかましい(黙示録 5:11~12)。「窓に映る夢のいくさや蝉しぐれ」。草刈りの後、ぼんやり昨夜の夢を反芻していました。反芻している内に、いったいどちらが夢だったか、何が現実なのか、混濁して来ます。

濁って淀んだ川とみすばらしい橋。空襲があるのに、灰色の石造り階段でうずくまり眠っている私。どうやら夢を見ているようです。夏の清冽な森、小屋の窓辺に朝日が粒子となって流れ込み、蝉が讃美するかのごとくに鳴いている。あっ、この光景、どこかで見たことがあるぞ。ひどく懐かしいような、寂しいような衝動に心がゆさぶられます。

聖書が語る天国の様子。「天に玉座が設けられていて、その玉座に座っている方がおられた(黙示録 4:2)」。座っているのは神様か、イエス様か。「その方は、碧玉や赤めのうのようであり、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた(4:3)」。表象とはいえこんな成金趣味ではなく、「窓に映る夢のいくさや蝉しぐれ」なら天国もいいのだけれど。

蝉は競うように鳴いて静寂ではなく、窓には戦争が透かし見えて平安でもありません。だけれども、恵みは、もうこれで十二分な感じです。はたして夢なのか、現実なのか。はたして世のことなのか、すでに天国にあるのか。はたして正気なのか、熱中症なのか。奇妙なあわひをしばらく漂った八月の、とりわけ暑い数時間でした。Ω